

# 蒼蒼

第103号

2002年2月10日 発行  
宅配料2年12号1000円  
(小額郵便切手可)

双月刊行有料宅配誌/編集兼発行人・中村公晋

株式会社蒼蒼社/東京都町田市森野2・26・16

## 『竹内実文集』刊行に寄せて

小島朋之

(慶應義塾大学総合政策学部長)

『竹内実文集』が中国で刊行された。

中国語版であり、中国社会科学院日本研究所の程麻研究員が編集・翻訳を担当し、中国文聯出版社から全十巻で刊行予定である。今回はまず四巻が出版された。

山東省に出生され、小学校時代に中国語を

学ばれ、中学校まで中国に暮らし、戦後に京都大学に入学以来、中国研究に取り組んでこられたのである。中国で中国語版による自著の『文集』が出版されることは、竹内先生にとって、夢想だになかったことであり、「中国各地の書店でそれら(『文集』)が並べられているのを考えると、中国を研究する一人として、無上の光栄を感じる」のは当然であろう。

竹内実先生は、編訳者が述べるように、「日本における最も著名な中国学者の一人」、「現代中国研究の第一人者」、「戦後日本の中国研究領域における創始者、泰斗」である。先生は中国研究の「第一人者」でも、「泰斗」でもないと思定され、こういわれることに、「いい気持ちがない」といわれる。しかし、事実として「第一人者」であり、戦後日本の中国研究を学問として開拓し、竹内中国学を築き上げてきたことは間違いない。

『文集』全十巻のタイトルはそれぞれ、

- 第一巻「回顧と思考」
- 第二巻「中国現代文学評説」
- 第三巻「毛沢東の詩と人生」

第四巻「毛沢東伝記三種」

第五巻「日中関係研究」

第六巻「文化大革命解析」

第七巻「中国の改革開放過程の追跡」

第八巻「比較文学と文化の研究」

第九巻「中国の歴史と社会評論」

第十巻「中国文化伝統の探究」

である。これだけで十分とはいえないが、十巻を通読すれば、竹内中国学の素晴らしさを体感できるはずである。

竹内中国学と呼ばれる所以は、多岐にわたっている。そのなかで二つだけあげれば、一つは中国への深い想いを根底に抱きながら、研究対象として中国の本質を抉り出す徹底的な分析作業にある。竹内先生の著書の一冊に「友好は易く、理解は難し」のタイトルが付けられているが、先生の日中間議論は安易な友好にとどまらず、相互に認識が異なることを理解することの重要性を出発点にしている。それゆえに、「魂を揺さぶる」文革に魂を揺さぶられて、「将来日本は中国の一部になります」などとアンケートに回答する中国研究の大家のような

安直な姿勢には決してならない。

いま一つは、重層的な中国を捉える重層的な研究にある。研究は広くて深く、「博大精深」の中国を等身大で捕捉してきた。研究分野は中国の歴史、語学、文化、文学、伝記、社会、政治、国際関係、日中関係などきわめて広いが、研究内容は資料の収集から修正・削除・追加の確認まで精力を傾注した原典による『毛沢東集』の編纂から、コオロギヤ「趣味の茶道を通じた中国社会の微視的透視にいたるまできわめて深い。

竹内中国学 の百科全書的な中国研究は、まさに「長くつづくトンネルを模索しながら前進する」ような作業である。それぞれが狭い専門分野ときゅうくつな分析枠組みをもつ研究世代のわれわれには、真似ができない力技の研究である。しかし、中国研究者を含めて、地域の全体を理解することが使命の地域研究者にとって、竹内中国学が目指すべき方向を指し示していることは間違いない。中国研究者はもろろん、地域研究として中国研究をめざす学生にとって、『竹内実文集』は必読の参考書である。

『文集』への竹内先生執筆の「自序」には、多くの人々への謝辞が書かれている。蒼蒼社の中村公省社長とともに、私の名前もあげられている。ありがたいことであるが、「謝辞」はむしろ竹内先生に捧げられなければならない。曲がりなりにも中国研究者の列になんとか加えていただけたとすれば、大学時代の恩師とともに、竹内実先生の心こもるご指導があったからこそである。一九八三年三月からはじまり、いまもつづく毎月連載の中国の動向分析について、数年間にはわたって筆を入れて下さったのは竹内先生である。改革・開放が都市でやっととはじまったばかりの一九八四年に、北京の日本大使館に専門調査員として赴任し、なお警戒心が強く残っていた中国側の研究者に接触することさえ難しい状況にあったとき、鄧小平の外交政策のブレインであった国際問題研究センター総幹事の宦郷先生を紹介して下さいましたのも竹内先生である。毛沢東の図書秘書を勤めた中国共産党中央文献研究室主任の 先知先生が、私を可愛がってくれるのも、竹内先生のご紹介があったか

らである。

多くの中国研究者が、自分こそが竹内実先生に目をかけてもらっていると思っているであろう。そつたとすれば、『竹内実文集』が先に中国語版で中国から出版されたのは喜ばしいことではあるが、いかにも残念である。学恩に応えるには本書の購入はもちろん、日本語版の『竹内実全集』の出版を目指すなければならないはずである。



## 故郷によせる思いと学術研究

日本の学者竹内実氏インタビュー

『文匯讀書週報』記者 朱自奮



二〇〇一年九月二十六日、浙江省の紹興飯店ラウンジのコーヒESHOPにて、記者は

日本の学者竹内実先生にお目にかかった。先生は銀髪、ライトグレーのスーツ姿で、豊饒として才気煥発、温顔坦懐にして快活であられる。先生の今回の訪中の目的は、第一に魯迅生誕一一〇周年記念学術討論会への参加であり、第二に『竹内実文集』全十巻のうち第一巻〜四巻が十一月初めに北京で出版されることに備えてである。この文集は、外国の中国研究者による国内初の中国語版文集であり、中日両国間の学術交流の慶ばしい一歩とみなせる。

「竹内実先生は日本の戦後における中国研究界の第一人者です。先生の中国研究の成果は、ジャンルの広さ、数量、質ともに他者の追隨を許しません。『竹内実文集』の出版は、新中国成立以来の五十年間に日本人がどのように中国を見ていたかを中国人が理解する一助となるでしょう。」

と、同行の中国社会科学院文学研究所研究員で同文集の訳者でもある程麻氏は語っている。以下は竹内実先生へのインタビューである。

### 中国に生まれ、中日両国で成長

記者：先生は日本の戦後の著名な中国研究家ですが、これは先生の特殊な経歴とかわりがありますよね？

竹内：はい、私は幼年時代から青少年期までずっと中国ですごしました。私は一九二三年に山東の張店で生まれました。両親は旅館を営んでいました。張店には十一歳まであり、満洲事变後に一家で長春に転居し、十八歳で初めて日本にもどり東京の大学に入りました。私は長男でしたが、日本の学校では、両親が望んだ商科ではなく自分が興味がある中国文学を専攻しました。また、生活の中で、私は当時の日本の社会との違和感を感じて家が恋しくなったものです。その家とはおぼろげながら、山東や長春の家でした。

程：竹内先生には、日中二つの文化的背景を持つ文化人の特長が集約的にあらわれています。二つの文化の狭間にあって先生特有の矛盾した心理から、中国に対する執着

心がよくわかります。

### 毛沢東時代の竹内実

記者：先生は日本で最も早く毛沢東詩詞、毛沢東思想を研究された学者の一人であり、この分野での日本の権威であられます。主要な研究成果をご紹介いただけますか？

竹内：『毛沢東 その詩と人生』（文芸春秋社）、『毛沢東』（岩波書店）などを出版しました。また、『毛沢東選集』に未収録の毛沢東の原テキストを収集整理し、『毛沢東集』全十巻、『毛沢東集補巻』全十巻（蒼蒼社）に収め、中共中央文献研究室より高い評価をいただきました。

程：先生は中国に対して愛情だけでなく、理性的思索があります。毛沢東を敬慕しながらも醒めた眼を持っています。「文化大革命」の十年間、先生は日本において、毛沢東に対し終始理性的態度を保ちました。それ以前に胡風は無罪であるとし、「中間人物論」批判に反対されました。これは当時の日本においてはきわめて難しいことでありまし

た。その頃は日本の学生の多くは「文革」に賛同し、紅衛兵との間で熱い連帯と交流を交わしたものです。一九六八年当時の日本の学生運動は凄まじいものがありました。

竹内：ただ指摘しておきたいのですが、当時、私は中国の「文革」に対し後になってほどの明晰な見識は持ち合わせず、思想的にはつきりしていませんでした。ただ、余人とくらべればはつきりはしていましたが、そのころ、文芸誌『群像』の編集者が原稿依頼をしてきて、テーマも決められていたのですが、そこに、ずっと考えてきた疑問を書いたのが、「毛沢東に訴う」です。私の学術的傾向は理論性より考証性ですが、中国では「文革」当時、文化界は不毛の荒野で文化のかけらもなく、本屋には本がなく、インテリは吊るし上げにあつており、おかしな現象だと思つたのです。「文革」賛同者にとつてはこれが気にいらなかつたのです。程：独自の見解を保持する代償として、先生は一九六〇年六月に毛沢東の接見を受けて以降二十年間、中国へ来る事が出来ませんでした。一九八〇年二月になってよう

やく再訪の機会が訪れたのです。

竹内：この二十年の空白は遺憾です。第一現場にあつて中国の歴史を目撃し体験する機会を逸しました。

程：中国にはいらつしやれなかつたのですが、先生はずっと中国に関連する情報に心を砕いてこられました。この二十年間に中国に関する資料を収集されスクラップ帳が百冊余りにもなりました。また、評論を多数執筆されており、その量には驚かされます。

### 竹内実の「第一弾」

記者：先生の長年の中国研究の中で会心の時というのがありでしょう。

竹内：（笑いながら）私の「第一弾」のことをお話しましょう。あれは一九七七年、華国鋒と鄧小平が（第十一回）党大会を主催し、会議の発言原稿が雑誌『紅旗』に掲載され、華国鋒は相変わらずの「文革」云々であつたのに対し、鄧小平は、インテリの労働は労働者階級の一部である。インテリはもはや九番目の鼻つまみ者ではない」と語りました。

私は鄧小平の英明さを見てとり、この問題について日本の雑誌に文章を発表したところ、この文章がすぐさま中国の『参考消息』に転載され、中国国内で大きな関心を呼んだのです。

程：当時、中国の改革の方向性がなお不明確な時期に、先生は日本において鋭敏にこの前兆に気がつかれたのです。

竹内：八〇年代初めは、私が改めて中国研究をはじめた時期です。当時の日本の学界は「文革」に大方賛同の姿勢で、多くの文章が発表され、中国が「向銭看」（金錢至上主義）になったと「批判」しました。しかし、私は中国人民の生活は以前より良くならねばと思いました。

### 学問は日中両国の理解のため

記者：先生の中国研究に対する洞察力は、多くの他の日本の学者が望んでも及ばないところであり、時代に先駆けていることさえありません。ぶつしてこのよつなことが可能なのでしょうか？

竹内：それは他の日本の学者が山東生まれじゃないからでしょう。（笑いながら）冗談ですけども、事実でもあります。第一印象の影響は強烈で、幼年時代にすでに中国を肌で感じたわけですから。私と中国との淵源はとても深く、私の生命力すべてが中国文化研究に注がれています。

記者：先生は一生かけて中国を研究してこられて、研究範囲もすこぶる広くておられる。目下の研究の重点はどこにありますか？

竹内：私の研究分野は、中国現代文学から毛沢東の研究、文革、日中関係、中国の改革開放過程分析、中日の文化比較に及んでいますが、学問の最終的着眼点は中国文化の淵源と実質の探究にあります。私が名づけた概念である「中華思想」の内包、生命力の源泉と世界での発展の前途などについて探究したいと思っています。

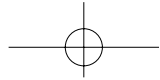
程：竹内先生の重要な観点として、「友好は易く理解は難しい」ということがあります。中日両国は一衣帯水ではありますが、相互理解に乏しいのです。中国人は、日本社会、民

族感情に対する理解が足りない。日本が何故中国を侵略したのか、日本が何故戦後迅速に復興したのか、などの問題は日本の文化伝統を理解してようやくわかることなのです。竹内先生ほどに中国を理解する学者は、日本では稀有であり泰斗であります。

竹内：はい、はい、もうこのへんで。私と程さんはどうしても意見が合わない点があり、程さんは私の文章に価値があると言つが、私は自分の文章に価値があるとは思わないし、現在にいたるも考えは変わらない。私の文章の多くは現実との結びつきが密接すぎるので、時が移り状況が変われば意義を失います。

記者：そのご意見には余人も従い兼ねます。先生はすでに一種の文化現象なのですから。竹内：おっしゃるとおりです。私の文章には価値がありませんが、それを通じて日本の文化界の動き、日本の民衆の中国認識を知ることができずし、中日両国民の相互理解の一助となりましょう。

記者：『竹内美文集』の中国での出版にあたり、読者に話されたいことは？



竹内：中国語での文集出版は願ってもないことです。中国語は日本語より国際性があるので、中国語で論文を発表すれば、海外の学術界でもすぐに読まれて反響があるでしょう。中国語版の出版は日本語版より重要ですから、中国科学院が程さんの研究計画を支持し、私の文集出版を支援してくださることを、研究者として光栄に存じます。まず、中国科学院の程さんの仕事に対する評価に感謝します。文集の内容は中日文化の系統的交流の第一歩であり、今後、さらに多くの日本の研究者やその他の外国の研究者の文章が中国で出版されるよう期待します。読者からの反響と交流も期待します。さらに、中国文聯出版社がこの本のために費やした多大な努力、カルビー日本研究基金より頂いたご配慮、中国の多くの友人の尽力、日本の先輩諸氏のお心遣いに対し篤く御礼申し上げます。

(原文『文匯讀書週報』二〇〇一年十月十七日掲載、(株)蒼蒼社編集部根津ひさ子訳)

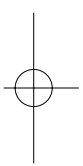
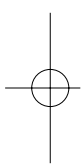
《自己紹介》 竹内実

中国山東省の小さな町に生れた。日本資本の紡績工場があった。現在の博市張店区。愛知県出身の両親は旅館を経営、泊り客は日本人。幼時に父死去。張店日本人小学校三年、四年の二年間、中国人の家庭教師について中国語を学ぶ。教科書は『急就篇』『官話指南』。母、弟、妹とともに満州国新京に移る。現在の長春市。母はアパート経営。西広場小、白菊小、新京商業学校。東京・二松学舎専門学校。学徒出陣。豊橋・中部十一部隊、一等兵。

京都大学文学部卒業(中国語学文学専攻)、東京大学文学部大学院修了(指導教官は倉石武四郎先生)。中国研究所、東京都立大。紛争で辞職、著述生活三年のち京都大学人文科学研究所。立命館大、北京日本学研究中心、杭州大、松坂大、関西大。

福岡アジア文化賞受賞(平成四年九月)。記念として蔵書を福岡市総合図書館に寄贈。竹内実文庫として公開。

これといった趣味はないが、じきじきに



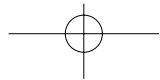
官休庵・武者小路千家・不徹斎 千宗守家元のご教授をいただくこと十余年、名譽十徳を授けられた。ただし茶人というほどではない。

平成十三年は佛教大学受講(毎週水曜午。学部「論語」、大学院「陰陽五行」)。秋に第5回「三國志」にちなむ中国旅行。中国語版『竹内実文集』刊行開始(編者は程麻 中国社会科学院文学研究所員)。

武者小路千家 学事顧問。カルビー 日本研究基金顧問。北京大学 日本研究中心顧問。日本日中関係学会(会長は中江要介前中国大使) 副会長・関西地区会長。

【著書】『中国 歴史の旅』朝日選書 『新版 中国の思想』NHKブックス 『北京』文春文庫 『大竹慎一と対談・元「人民元」のメンツと市場の意志 中華思想に見る経済の原点』フォレスト出版 『中国 国情と世相』研文出版 『中国文化論Ⅰ・食の文化』京都造形芸術大学テキスト 『中国はどこへ行くのか 毛沢東初期詞文集』岩波現代文庫

【論文】『北方のみやこ・南方の文化』故宮。4所収、日本放送出版協会 『究極の



価値「中華思想」亜細亜大学アジア研究所編『アジア人の価値観』所収、アジア書房刊  
「大国」中国 実像と虚像（毛里和子と対論）『世界』三月号

【翻訳】 宋木文、中国の出版改革『桐原書店 毛沢東・毛沢東語録』平凡社ライブラリー  
先知『毛沢東の讀書生活』（浅野純一と共訳）サイマル出版会

【連載】 「中国のお茶さまざま」起風『武者小路千家・官休庵（〇七五）四一一 〇〇〇』  
「中華悠悠」中国語『内山書店（〇三）三二九四 一〇〇〇一』  
「長江 歴史の旅」一冊の本『朝日新聞社（平成十二年八月、十一月、平成十三年二月、五月号）』

【素読】 講義のさい古典鑑賞、味読（まいどく）の一助に素読、あわせて『教室のきまり』を実施『教室のきまり』私語をしない  
携帯の電源を切る 違反者は退場させる（ただし、初回にかぎり鐘を鳴らしイエローカードをみせて警告するにとどめる）

「平成十三年十月現在。これは講演の際や大学での授業のはじめに配布しているもの」

## 中国は何処に向かう？

### 10 20年後を冷静に展望

同時多発テロの衝撃の大きさに驚愕してその展開が十分読み取れなかったが、二十一世紀初年の今年は中国にとって転機年、変革年になった。驚愕した北朝鮮問題（9月10日）加入交渉のめどが、11月28日北朝鮮の核実験が実施されたのである。

その中国は、これからどうなるのか、やがて新しい中国時代が到来し、平和的な発展が期待される。その時、正統的な中国復興を求め、青年の熱い中国復興感情が交差し、燃焼して来た。この燃焼は中国という国家をどう扱うか、戦後史の教訓をどう生かすか、日本でも韓国でもその高揚を主として自国の経済技術の発展に役立てた。単純化して言えば、好成績を挙げていると高揚感が増え、本邦への影響は強くなる。いまだ、日本には、高田中国入りによる影響を懸念する声や、中国の発展に懸念する声や、その高揚感や、その高揚感をももたらす中国復興の努力が注目されている。

その中において本書は、戦後の中国の政治・経済・軍事・外交として十数年の間のその分析を整理し、先年十二年度の調査報告を出した。その調査報告は、調査報告と調査報告でも、調査報告と調査報告である。調査報告を調査報告、その調査報告と調査報告に調査報告と調査報告である。

中国の発展をどう見る、中国の発展の分析は、調査報告の調査報告である。中国では、1978年12月18日（1978年12月18日）の改革開放政策の発表、1989年6月4日（1989年6月4日）の天安門事件、1997年7月1日（1997年7月1日）の香港の返還、1999年12月20日（1999年12月20日）の澳门の返還、2001年12月11日（2001年12月11日）のWTO加盟、2002年12月9日（2002年12月9日）の『読賣新聞』の調査報告である。

『読賣新聞』2001年12月9日付書評

逆耳順耳

矢吹 晋

## 忽然中産

NHKエンタープライズの岡崎泰氏、ドラゴンフィルムズの張怡、山口千咲さんなどとニューオータニ六階の和食レストランで昼飯を食べながら、番組の打ち合わせをしたのは、昨年十月一九日であった。

その後、一月に私は約一カ月、北京外交学院での講義に出向いた。一月二二日、東京から岡崎氏が飛んできて、夕飯。そこで次の日曜日に取材という話になる。

一八日昼前、香港の金持ち李嘉誠の作った王府井東方広場で昼飯を食いながら、具体的な打ち合わせ。そのまま王府井に出て番組冒頭の一分解説を録画する。その後、野菜市場を背景に三種類の物価水準という話をする。

たとえば、大学内の食堂なら、二丁三三元三〇〜四五元)でメシが食える。街のカッコイイ・レストランなら、ハンバーグ定食、カレーチキンなどが二〇〜三〇元(三〇〇〜四五〇元)である。しかもこれは個食用だから一人

で飯を食うのに向いている。さて、北京の仲間と再会を祝して、酒鬼などを空けようという話になると、これは一人当たり二〇〇〜三〇〇元ではおさまらない。

私は一日の間に北京の低所得階層の生活と中間層の生活と外国人・高級幹部レベルの生活を体験する。日本でも高い店、安い店はいろいろあるが、これほどの格差はない。

ざっとそんな説明をして最後に、中国大飯店(国贸大厦コンプレックス)近くで番組終わりの一分間まとめを録画しようとして屋上へ。屋上で足をつまみずき、転倒した。

右頬をすりむき、血がにじむ。メガネはグニャグニャに曲がった。しかし、この日しか時間がない。撮影続行。あつという間に終わり、まずはホテルの医務室で簡単な手当で破傷風を防ぐ消毒をして軟膏を塗る。ついでメガネ屋へ行き、ゆがんだフレームをなんとかかけられる形に直す。しかしガラスの傷はいかんともしがたい。プラスチックだから傷で済んだが、もしガラスなら、砕けちり眼球を損傷したかと思うとひやりとする。

数日後、連絡があり、「撮影やり直し」だという。中産階級の説明の根拠が曖昧だ。先生の説なのか、中国のエコノミストの説なのか、はっきりしない。ついでには三五日(日)

に撮影し直すので、よろしく。  
やれやれ。(なぜ日曜日なのか。中央電視台の現役カメラマンをアルバイトとして使うからだ。平日は仕事があるので、日曜日に仕事を頼む形だ。)

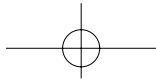
その二五日は寒く、風が強かった。もうケソゾーのコートを脱げない。ポケットに両手を突っ込んだまま、しゃべる(後日、テレビを見た学生がコートに両手を突っ込んだままのレポーターなんて初めてだ。失礼じゃないのですか、と老師をたしなめる。そんなこと言われたって、零度前後の気温なのだよ。寒くて寒くて失礼もクソもないよ)。

今回は、国家统计局の家計調査に基づいて中国国家信息中心のエコノミストが「二〇〇五年に「億人」が中産階級になると展望したことを付け加える。ついでに、吉利自動車のトピックへの切り換えのために、中国の自動車事情を一分解説した録画をとる(これは結局使われなかった)。

二月二八日、最後の打ち合わせ。番組のプロデューサーたちは、一方で中産階級の映像を信じながら、他方で、この中産階級が何%かをひどく気にしている。

そこである調査専門会社の専門家の声を伝える。日本の市場調査では数%という数字は「誤差」として無視するのが常識だ。し





かし、中国ではたとえ1%でも、一二〇〇万人だから、絶対数としては無視できない。中国の数字は、コンマ以下でも無視するくらい間違いを犯す。然り、中国を見るときは、いつも鳥瞰図と虫瞰図、比率と絶対数字を複眼で凝視しなければならない、と説く。最後に、中産階級という範疇は曖昧だから、八〇〇〇万人でも一億人でもかまわない。いまの成長率ならば、多少過大に見ても、あつという間に実績が目標を上回る。たとえば陸学芸主編『当代中国社会階層研究报告』（社会科学文献出版社、二〇〇二年一月）の話をする（この本は年が明けてから『読売新聞』北京特派員石井尚氏がわざわざ航空便で贈ってくれた。つまり、暮れの話は、新聞の伝えた要旨に基づく解説。さて正月に番組を見ると、わざわざ撮影し直した部分が使われていない。ムム。画面を見てナットクが行く。ある雑誌が「忽然中産」という特集号を作り、忽然と現れた中産階級のイメージを紹介している。この特集号のおかげで、私がかくどくど説明する必要はなくなつたわけだ。番組を見た友人知人からいくつもの感想が届く。

\* 今朝の番組の冒頭の映像では、黒い

髪の毛がすっかりとあるので、カツラではないかと思いました。しかし最終の場面では髪の毛が、自然な形で風に揺れていました。カツラではなかったわけですね。最近仲間の誰も彼も、ハゲが白髪になっていきます。私は、かなり前から白髪、それも脱毛してハゲになりにかかっています。中国の経済の話、知らないことばかりでしたが、興味深く拝見しました。すこし番組としては、くどい感じがしましたけど、子供を抱いたマダムは、なかなか魅力的でしたな。

新年好。今日、当番で、再放送見えています。矢吹先生もなかなかのテレビ映り、コメントも落ち着いて、堂々としたしゃべり。喫驚致しました。

たった今、「中産階級が国を変える」を見終わったところです。タイトルが若干刺激的に過ぎたきらいもありますが、今のワイルドで、エネルギーシユな中国の姿が良く伝わる番組でした。なお、番組の構成で一つ気になったのは、先生の出番が少なすぎた点でした。元旦から三日間は深で過ぎました。深に行つたこと自体が思いつきだったので（八九年に一度行つたことがあります）、これまた思いつきで、羅湖を渡つて日帰りで香港に行き（マルチのビザがあるもので）、飲茶をしてみました。

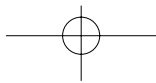
短い滞在でしたが、香港と深の一体化を身をもって感じた次第です。

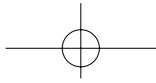
三日午後十時からの再放送を家族揃つて拝見させていただきました。中国の躍動が手に取るようにわかりました。まさしく一九六〇年代の日本を思わせるものがあります。二世紀は中国の時代という感をいつそう強くもちました。多分、番組構成の中身にまで先生が深くタッチされているようにも思いました。

昨日のテレビは大変参考になりました。中国の情報は好意的な情報と批判的情報とでは格段の相違があり、だからこそ朝河貫一の視点が大切なのだと思いました。

正月番組を興味深く拝見しました。番組の狙い、貴兄の解説ともに妥当であつたと共感しました。

先生、昨日の放送見させていただき、ありがとうございました。非常に驚きました。というよりも、中国が恐ろしくも感じました。あの番組を見て、衝撃を受けた人も結構多いのではないのでしょうか。なにしろ十億の国の人々が（全部でないにせよ）あのような強い上昇志向をもって活動していたら、すこい国が出来上がりますね。中国は、国内だけでもすこい市場があり、底力は無限のような気がします。日本なんて、とても太刀打できないの





ではないでしょうか。もちろん、あのミミの才能あるご夫婦の仕事をバリバリこなし、生活も楽しむという姿勢もすばらしいと思いましたが、「李書福」氏が一番印象的でした。何年か前に本田宗一郎氏がなくなったときに、T I M Eの有名人の死亡欄に、「Boy Who Chased a Car」という例外的に大きな記事が載ったことがありました。「李書福」もまさに車を追いかけた少年だったのですね。私がこの人を好きな点は、これだけ事業が成功しても、「生活を楽しむ」なんて言わないで、「質素・節約」を旨として「高い志を持ちながら」こつこつ働くことが大切」と言っている点です。日本がとうに忘れた価値観がここにはあるような気がします。教育の問題も含め、日本は今後どうすべきかを考えさせられました。

中国にも、程、閻夫婦のようにW T O加盟を商機ととらえ、積極的に飛躍しようとする人々が形成されているのを見て、驚き、また喜びました。また、W T O加盟は中国農業に重大な影響を与える、とはよく言われますが、農民のなかにも、積極的に反応をしている人々がいるのを見て心強く思いました。ただ、中国には八億の農民がいます。当然中には、W T Oに適応できず農業を捨て、都会に生活のために流れてくる人々

も出てくると思います。程、閻夫婦の家で働いていた陳さん一家のような友人達でしょうか。人口でいえば中国最大の産業・農業で、どれだけの人が適応できるか、心配な面もあると思います。吉利グループの李書福氏については、まさに「中国の本田宗一郎」とも呼ぶべき人ではないでしょうか。彼の歩みも平坦ではなかったようですが、自身の才覚と努力によって切り抜け、向上心をいつまでも燃やしています。私の手持ちの本に、「二〇〇〇年度中国「福布斯」五〇富豪」(金城出版社、二〇〇一年一月刊)があり、この本に李書福氏の経歴が掲載されています(一月四日多田敏宏)。

N H K中国特集を存分に見ました。大変に興味深い、奥行き深い見聞のある中国経済特集でした。特に自動車経営者とお手伝いさんの二人がよく描かれていると思いました。矢吹さんの解説も気取らずに大変良かったと思います。

新春に素晴らしいT V番組を拝見でき感動しました。有難うございました。開放前後から八〇年代中心に見てきた中国がいまや、あのような中産階級層が続々誕生している様子に、信じられない思いで画面に釘付けになっておりました。以前の農村の生産高請責任制とか郷鎮企業などがどの

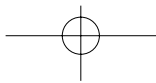
ような過程を辿っているのか、すっかり中国に縁が薄くなっていきますが、今一度見直してみたいと思ったりしました。現在の日本にとつて本当に考えさせられる内容であり、矢吹先生がコンテに相当腐心されたことと存じます。

N H K B S Iの番組拝見しました。中国の若々しい力を実感し印象的でした。日本の所得倍増時代より迫力があるようですね。

非常に興味深い内容でした。中産階級といっても幅は相当ありますが、確かに、こうした層が今後の中国を変えていくことになるでしょうね。また、北京はこの一年で従来にも増して勢いをつけたように感じました。

番組拝見しました。ずいぶん寒そうでしたね。それにしてもあの月収一〇〇万の夫婦はもはや「上流階級」なのでは？ 我が家よりも収入が多い。

\* やはり映像の力は大きい。私がか本を書いても、これだけの反応はない。台湾では別の番組が放映されたので見られなかったという苦情が届き、他方ソウルからは、「五年後、十年後、中産階級ほどの程度に増えるか」と問い合わせがあった。最後に、ドラゴンフィ



ルムズの山口さんがNHKのモニターの声を教えてくれた。

明るい活気、驚き。今後の中国全体の動きが分かった、という声が全体の感想として多く、「中国に脅威を感じる」という感想も、何をするか分からない不気味さ、からではなく、「下り坂のままの日本」は、夢とサクセス・ストーリーにあふれる中国にまけてしまうのではないか、という理由からのものが多かったようです。「中産階級」は視聴者に新鮮な驚きを与えています。成功です。

## 『わが父、毛沢東』

多田敏宏様

『わが父、毛沢東』をお送りいただき、ありがとうございます。早速一読し、「娘の語る毛沢東」には、類書にない記述があることを発見しました。

誕生日が分からないこと

驚きで

す。「嬌嬌」の名付け親は鄧穎超であった。

モスクワ時代の賀子珍のことも王稼祥夫人の記述よりもよく分かります。ユージンが毛沢東のところへ李敏たち

を連れて行くのは、まさに人質を返しにいこうなもの。

賀怡と毛沢東のやりとりも面白い。

毛沢東の偽名・李得勝の李は、「江青の本名・李に基づくものか」と推測していたのですが、「離得勝 すなわち、延安を離れることによつて勝つ」とは、知らなかった。

毛沢東、江青関係のビミョーなところで、より鮮明になった部分もあります。

私の感想はざっとそんなところです。毛

毛の『わが父・鄧小平』よりも、ドラマチックです。家族関係が複雑な分だけ、人間関係のアヤが陰影として深くなる。ところで、「中産階級」についてのコメントもありがとうございました。李書福氏の資料も知りませんでした。（この寧波取材には、私はつきあっていないのです。）

大兄のご感想はNHKのディレクター氏にも伝えておきました。

お礼までに一言、ご健筆を祈ります。

## 『禁じられた稲』

清野真巳子様

『労作』禁じられた稲』を興味深く拝読し

ました。ポルポト水路のことは、まったく知らなかったもので、まさに興味津々。私がカンボジアを訪ねたのは一九六九年一月のことでした。「日本カンボジア友好農業技術センター」も訪ねました。そこで砲撃をいくどか耳にして、「ベトナム国境では戦争があるが、カンボジアは平和だ」と聞かされたことを記憶しています。ロンノル・クーデタは翌年初めのみです。

七二〜七三年にはフィリピンでERRIも訪ねたことがあります。つまりベトナム戦争とマレー半島のゲリラ、そして農民獲得作戦としてのミラクル・ライス物語などは、私の頭のなかにプリントインされています。ただし、東南アジア放浪を終えて、七三年春にアジア経済研究所に戻って以後は、東南アジア研究（華僑研究）から離れ、大陸経済にシフトしてしまい、フォローアップができていません。その空白の一部を埋めていただいた気分です。

私は定年になったら、六九〜七三年に放浪したサバ・サラワクなども含めて感傷旅行をやりたいという夢をもっているのですが、実現できるかどうかは分かりません。取り急ぎお礼まで。